

令和 2 年 5 月 12 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03234

研究課題名(和文)「両墓制」及び火葬墓制の仏教民俗学的研究

研究課題名(英文) A Study of Ryobosei and Cremation Buddhism Folk

研究代表者

岩田 重則 (Iwata, Shigenori)

中央大学・総合政策学部・教授

研究者番号：20272619

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本申請研究は、滋賀県を主なフィールドとして、この地域に多い両墓制と民俗的火葬墓制を、仏教的な極楽往生信仰としてとらえた。これまでの研究では、両墓制は、仏教的存在ではなく、日本固有の民俗信仰としてとらえられてきた。しかし、本申請研究では、詳細なフィールド調査により、両墓制とはそのようなものではなく、典型的な仏教民俗であることを論証した。それにより、従来の両墓制研究に対して、新たな知見を提出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本申請研究は、これまで日本の民俗学および人文科学が、固有信仰の典型例としてとらえてきた両墓制を、主に滋賀県をフィールドとした調査・研究により、それがそうではなく、仏教的な西方極楽信仰であることを論証した。同時に、この地域は、伝統的な民俗的な火葬墓制が両墓制と併存しており、それが両墓制以前を示す仏教的な墓制であることを指摘した。本申請研究は、これらの指摘により、通説に対して再考をうながし、日本の墓制および葬送儀礼研究に新たな知見を付け加えたといえる。

研究成果の概要(英文)：Japanese grave was understood as Japanese ethec own culture by previous research. But the study proved that Rpyobosei and cremation in Shiga prefecture were Buddhism folk. I obtained new research results about Japanese grave.

研究分野：民俗学 歴史学

キーワード：両墓制 火葬墓制

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本申請研究を開始する当初、日本の墓制研究は、研究史上もっとも中心をしめてきた両墓制研究において、それを日本の固有信仰としての祖霊信仰ととらえるというものであった。その通説の原型を形作ったのは、『先祖の話』(1946、筑摩書房)などによる柳田国男の説であった。その後、それは、柳田国男の弟子最上孝敬などに継承され、最上の『詣り墓』(1956、古今書院)はその通説を確固たるものとした。その内容を具体的にいえば、両墓制は、遺体埋葬地と石塔建立地とがいちじるしく離れ、空間的に分離している墓制をいい、そのうちの石塔こそが日本の固有信仰としての祖霊信仰を示すとされた。

以後、日本墓制、その典型例としての両墓制を、固有信仰としての祖霊信仰とする通説は、民俗学のみならず、他の人文科学においても通説とされ現在に至った。しかし、申請者はこの通説を岩田[2003][2006][2010]などによって再検討した結果、それを固有信仰論によってとらえるには無理があり、民俗の世界における仏教受容によるものではないかという仮説に到達した。

本申請研究は、申請者におけるこのような先行研究に対する再検討に基づいている。

2. 研究の目的

本申請研究は、上記の再検討に基づき、両墓制について、あらためて両墓制とは何か、それを明らかにすることを目的とした。そして、そのために、下記のような仮説をたてた。

一つは、両墓制は、日本の固有信仰としての祖霊信仰ではなく、仏教的な西方極楽信仰が民俗的世界に受容された仏教民俗ではないか、ということである。通説では、両墓制の石塔墓地を祖霊信仰の典型例とするが、しかし、実際に両墓制の石塔墓地を確認してみると、それは寺院境内墓地として存在することが圧倒的に多く、この事実のみをもってしても、両墓制を仏教と分離させてとらえることはできないのではないかと考えた。

もう一つは、両墓制が濃厚に分布する滋賀県など近畿地方から北陸地方にかけては、両墓制と民俗的火葬墓制が並存する機会が多いため、両者を同質な墓制としてとらえることができるのではないだろうか、ということである。民俗学だけではなく、他の人文科学でも、伝統的な民俗的火葬墓制については研究のみならず着目す少ない。しかし、民俗的火葬墓制が広範囲に存在してきたことも事実であり、この民俗的火葬墓制と両墓制とを相互連続性の上でとらえることが必要ではないかと考えた。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、本申請研究では、両墓制と民俗的火葬墓制が並存する地域、特に滋賀県を中心として周辺地域までを主なフィールドとして、そこに存在してきた、両墓制と民俗的火葬墓制を、フィールド調査によって、比較研究する方法をとった。

もっとも重視した研究方法のひとつは、両墓制の遺体埋葬地と民俗的火葬墓制の火葬場の比較である。遺体埋葬と火葬という、遺体処理方法には相違があるとはいえ、そこにおける葬儀最後の野葬礼、そこに存在する六地藏・棺台・「南無阿弥陀仏」などの石碑などについてみると、遺体埋葬地と火葬墓とはそこでの儀礼およびの空間配置が、きわめて類似することも理解できた。それにより、研究目的とした、両者の仏教民俗的存在としての把握が論証できるのではないかと考えた。

もうひとつの重視した研究方法をあげると、両墓制の遺体埋葬方法と民俗的火葬墓制の火葬骨処理方法の比較である。両墓制では、遺体を埋葬するだけで、その埋葬地を顧みず参拝さえしないという事例が多い。遺体が実質的に祀り捨てられる。いっぽう民俗的火葬墓制では、集落の火葬場で火葬すると、遺骨収集は部分収骨が圧倒的に多く、遺棄される火葬骨も多く、かつては、全部が遺棄されたという事例さえあった。このような、両墓制の遺体埋葬と民俗的火葬墓制の火葬骨処理方法とを比較し、それによって、両者の同質性を明らかにする方法をとることにより、両者ともが、遺体・遺骨を軽視しているという事実を明らかにすることができると考えた。

4. 研究成果

上記の研究の研究方法によるフィールド調査により、本申請研究では下記の成果を得ることができ、また、その成果を公表した。

(1)両墓制の遺体埋葬地と民俗的火葬墓制の火葬場、またそこでの野葬礼を比較検討したとき、両者ともが、そこで行なわれている儀礼としては、仏教的西方極楽信仰に基づくものであった。もっともわかりやすい事実をもってそれを説明すれば、両者ともが、最後の野葬礼を行なう際、野辺送りのあと柩を置く棺台の前にはその多くで「南無阿弥陀仏」などの西方極楽信仰を意味する石塔があった。遺体埋葬の前、また、火葬の前、それは「南無阿弥陀仏」の前で最終儀礼が行なわれていたのである。明らかに、そこで示されるのは、「固有信仰」としての祖霊信仰ではなく、仏教的な西方極楽信仰であった。

(2)このように、仏教民俗として両墓制と民俗的火葬墓制を理解することができたが、それとともに、両者の比較によって、民俗的火葬墓制から両墓制への移行が明らかになった。具体的移行の経過を証明できた事例もあり、また、それは明治以降、近現代の移行である事例すらあった。また、それとともに、仏教宗派による違いも明らかになった。浄土真宗を檀那寺とする集落では民俗的火葬墓制を継続し、浄土真宗以外の宗派(滋賀県では天台真盛宗・浄土宗・曹洞宗などが多

い)では両墓制をとることが多いことも明らかになった。この宗派による違いがなぜ生じているのか、今後の課題としても取り組んでいきたいが、いずにせよ両者ともが西方極楽信仰による墓制をとることを本申請研究は明らかにすることができたと考えている。

(3)上記の成果として、もっとも主なものとして、岩田 [2017][2018]をまとめ公表した。

【引用文献】

岩田重則

2003 『戦死者靈魂のゆくえ—戦争と民俗』、東京：吉川弘文館。

2006 『「お墓」の誕生—死者祭祀の民俗誌』(岩波新書新赤版 1054) 東京：岩波書店。

2010 「「葬式仏教」の形成」、末木文美士他編『新アジア仏教史 13 日本』、東京：佼成出版社、pp.273 - 326、pp.435 - 440。

2017 『天皇墓の政治民俗史』、東京：有志舎。

2018 『火葬と両墓制の仏教民俗学—サンマイのフィールドから』、東京：勉誠出版。

最上孝敬

1956 『詣り墓』、東京：古今書院。

柳田国男

1946 『先祖の話』、東京：筑摩書房。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩田重則	4. 巻 45-2
2. 論文標題 明治政府新造の人格神 墓を抱え込んだ神社と脱落させた靖国神社	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 81-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岩田重則
2. 発表標題 両墓制の仏教民俗学的考察
3. 学会等名 東アジア比較都城史研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shigenori Iwata
2. 発表標題 The Tomb of Tenno in Modearn Japan
3. 学会等名 The Death of Fuaneral Rites (The Academy of Korean Studies, Korea)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 岩田重則	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 325
3. 書名 火葬と両墓制の仏教民俗学 サンマイのフィールドから	

1. 著者名 岩田重則	4. 発行年 2017年
2. 出版社 有志舎	5. 総ページ数 522
3. 書名 天皇墓の政治民俗史	

1. 著者名 岩田重則	4. 発行年 2018年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 363
3. 書名 日本鎮魂考 歴史と民俗の現場から	

1. 著者名 岩田重則	4. 発行年 2017年
2. 出版社 有志舎	5. 総ページ数 523
3. 書名 『天皇墓の政治民俗史』（単著）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----